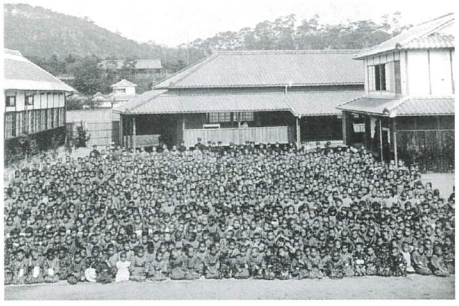
石井十次と岡山孤児院



石井十次



孤児院

キリスト教の伝道に伴う教育活動は、キリスト教ヒューマニズム、倫理観などを岡山の地に広めるという働きをした。やがて、岡山から、社会事業に活躍する人々を出したが、その一人に石井十次がいる。

彼は1865年（慶応元年）4月11日に、宮崎県児湯郡高鍋町上馬場原に生まれる。彼は萩原百々平というクリスチャンに導かれ、キリスト教に接するようになった。

そして彼は、1882年（明治15）医学を学ぶために岡山に向かい岡山県甲種医学校に入学する。当地に来て、岡山基督教会を訪ねたが、牧師金森通倫に面会できず、一旦天主教に入り、岡山医学校に入学した。その後、1884年（明治17）11月2日岡山基督教会で牧師金森通倫より洗礼を受けた。この日、教会員である炭谷小梅と面会した。後に、炭谷は、彼の信仰生活と孤児院事業のよき指導者、支援者となり、石井は精神的母として慕うようになった。彼は金森牧師、岡山教会会員たちの温かい導きを受けますます信仰を深めていった。

1887年（明治20）4月、邑久郡邑久町大宮村（現岡山市）上阿知の診療所で代診していた石井が、大師堂の貧しい孤児たちに出会い、それが孤児院事業の出発点となった。同年9月22日、孤児教育趣旨書を公表、3名の孤児を預かり日本孤児教育会を、岡山三友寺に開設した。最初は、5、60人を収容する小規模なものであったが、1904年（明治37）日露戦争とそれに続く東北の飢饉などによって、1200人も収容するという大世帯の孤児院となった。

1895年（明治28）2月米国留学から帰国した第二代牧師安部磯雄は「ユニテリアン」（三位一体論を否定、単一人格の神を主張、イエス・キリストの神聖を認めず、その贖罪を無意味とし、聖霊を神の現存とする教派）の思想を教会で宣教し、石井と信仰告白に関して、意見が対立した。石井は本教会を同年10月22日退会し、10月27日岡山孤児院教会を設立した。しかし、1901年（明治34）6月、第四代牧師安部清蔵が着任、本教会との関係を修復し、岡山孤児院教会は、本教会と合同することとなった。翌年3月1日岡山聖書伝道会が石井を中心に設立、炭谷小梅、上代淑などが名を連ね盛んに伝道が行われた。

孤児院は、孤児の成長につれて、1912年（明治45）3月、一部の里子を残して本拠を宮崎県日向茶臼原に移した。日本の孤児院の父といわれ、日本におけるセツルメントの開拓者であった石井十次は、1914年（大正3）1月30日に茶臼原で、49年の奉仕の生涯を閉じた。その後、大原孫三郎が理事となり経営を継承したが、1926年（大正15）岡山孤児院は解散した。